

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

『更別農観社会』の創造 ～「人と人との架け橋」と「絆」の構築を目指して～

受賞者 国際トラクターBAMBA実行委員会
ほつかいどうかさいぐんさらべつむら
(北海道河西郡更別村)

■ 地域の沿革と概要

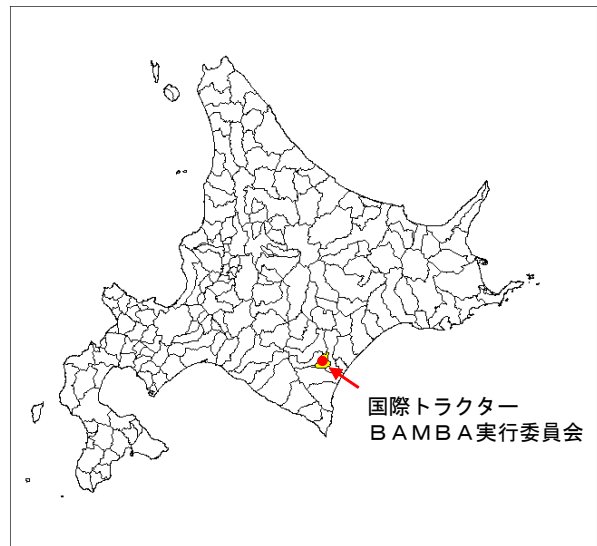
更別村は、北海道東部の十勝平野の南部に位置している。東西は25km、南北は15kmに及び、総面積は176.77km²となっており、雄大な日高山脈が一望できる自然あふれる村である。十勝地方の空の玄関口「とちかち帯広空港」へは役場から車で10分であり、十勝で最も東京に近い村でもある。

冷涼で寒暖の差が大きい気候をいかし、畑作物としてばれいしょ、てんさい、小麦、豆類などを中心に寒冷地に強い作物が生産され、畜産では乳牛約6,000頭、肉牛約2,000頭が飼育されている。また、豊かな大地をいかし、農家一戸当たりの耕作面積は約47ha、トラクター所有台数は約4台であり、国内最大規模の大型機械化農業が行われている。

人口については、約3,400人と規模は小さいが、近隣市町村において過疎化が進行して人口が減少する中でも、横ばいで推移している。

更別村は、現在、「いつまでも住み続けたいまち 豊かさ・安心・笑顔あふれる夢大地」をテーマとする第5期総合計画に基づいて村づくりを進めており、誰もが心身ともに健やかに暮らせる村の実現を目指している。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	地域内等の実行委員会に参画する集団
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	18.3% 総世帯数 1,274戸 総農家数 233戸
専業別農家数 (内訳)	233戸 専業農家 135戸 1種兼農家 94戸 2種兼農家 4戸
農用地の状況 (内訳)	耕地計 10,999ha 田 ha 畑 8,921ha 草地 2,078ha 耕地率 62.3% 農家一戸当たり耕地面積 47.2ha

■ むらづくりの概要

1. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

更別村の歴史は、明治30年代の入植から始まり、農耕馬が開拓の原動力として大きく貢献してきた。農耕馬は、畑の耕起や厩肥の生産など農業には欠くことのできない重要な役割を担っており、加えて地域の輸送手段でもあった。そして、地域のお祭りなどでは草競馬やばんえい競馬（略して「ばんば」）が開催されるなど、生活に密着しており、時には家族として扱われてきた。

しかし、十勝地方には湿性火山性土などの排水の悪い土壌や石れきの多い土壌が分布しており、馬での土地改良には限度があったことから、昭和40年代からほ場整備や排水改良などの土地改良が推進されてきた。それに伴い、農業の分野においては機械化が進み、次第に馬との関わりも希薄になったが、代わりにトラクターが家族の一員として農耕馬と同じような位置を占めるようになった。

このような時代の変遷を受け、更別村では今日における生産性の高い更別農業が成立して発展してきた。近年の厳しい経済環境の中、村の商工会では平成14年度に北海道の補助事業である「地域資源調査事業」を活用し、村の更なる活性化を図るための検討を行った。

この調査事業において、住民が村おこしの先進事例を視察し、地域活性化の手法を学ぶとともに、綿密な調査・検討を行った結果、

- ・「大規模農業」
- ・「肥沃な大地」
- ・「労働と活力・トラクター社会」

など、更別の農業を素材とした地域資源が村にあることを発見した。

これを契機に、農・商工関係の若者達が「十勝平野の地平線をバックに爆走する大型トラクターの姿」を想像したことが発端となり、平成15年4月30日に村民の自主的参加による「国際トラクターBAMBA実行委員会」が設立され、「人の交流促進」「情報発信」を通じた「更別農観社

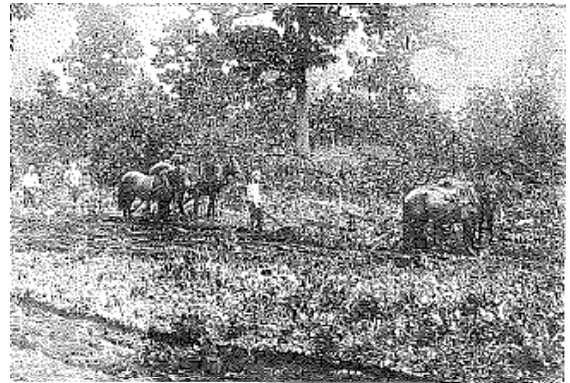


写真1 開拓当時の作業風景（農耕馬）



写真2 現在の作業風景（トラクター）

会」の創造に向けた新たなむらづくりがスタートした。

平成15年7月12日には、手探り状態の中で「第1回国際トラクターBAMBA」の開催が実現し、3,500名の来場者を迎えた。その後、回を重ねるごとに来場者が増加し、それまで無名だった更別村に道内のみならず全国各地から人が訪れ、更別村の一大イベントへと成長した。

平成24年の第10回記念大会には過去最大の17,300名が村に訪れ、道内のうち、十勝管外から約5,000名、道外から約600名の来場者があったと推計され、地域の活性化に寄与している。



写真3 ばんえい競馬



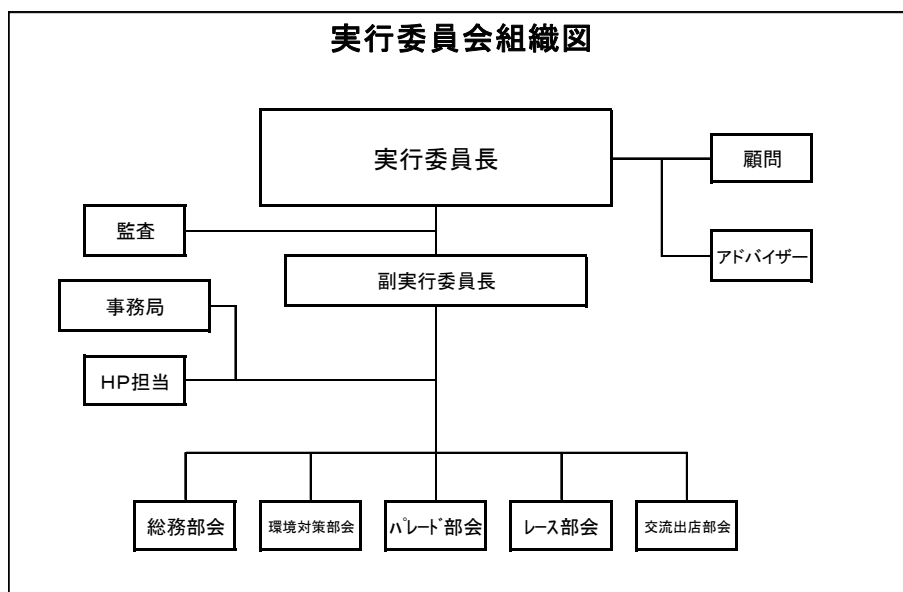
写真4 トラクターBAMBA

(2) むらづくりの推進体制

実行委員会には、「人と人との架け橋」になればとの思いから、多くのボランティアや村外の方が参加しており、186名が構成員となっている。また、年齢構成も10代から70代までと幅広く、広範囲な人々の繋がりが特徴となった取組が行われている。

さらに、村内に工事現場を有する企業が地域貢献活動の一環として実行委員会の活動に参画しており、地域が一体となったむらづくりの推進体制が構築されている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. 農林漁業生産面への寄与状況

イベントの開催に当たり、実行委員会が更別村（食料基地）の農業情報を発信することによって、消費者（都会に暮らす人等）との交流が生まれ、安心・安全な食・農産物や農業の大切さを村外にアピールすることに貢献している。

ただし、今年で10回目の開催となるイベントは、毎回順調に行われたわけではない。過去には、村内の畑作圃場への病害虫（ジャガイモシストセンチュウ）侵入の懸念によって開催の是非が検討されているほか、平成22年の第8回には宮崎県内で発生した家畜伝染病「口蹄疫」の被害拡大を防止するため、開催の自粛が決断された。イベントの開催に当たり、関係指導機関から情報収集、防疫対策に関する勉強会を開催し、病害虫の圃場侵入防止対策や家畜伝染病の防疫対策にも万全を期していかなければ、農業経営に大きな打撃となることを関係者が再認識することによって、地域農業を自らの手で守るという意識改革にも繋がっている。

イベント会場には北海道帯広市で開催されているばんえい馬とのふれあいコーナー、メカ馬（トラクター）試乗会、ミニメカ馬遊具コーナー、北海道開発局帯広開発建設部及び北海道十勝総合振興局による農業農村整備事業のパネル展などを設置して幅広い催しを行うことにより、地域の将来を担う子どもたちへ農業の魅力を伝えるとともに、農業後継者の育成につなげている。



写真5 未来の農業後継者

2. 生活・環境整備面への寄与状況

実行委員会構成メンバーは、年齢や職業など多種多様であるが、各々の職場での地位・役職にとらわれることなく活動している。イベントの開催を通して培われた実行委員相互のネットワークは地域経済の活性化のみならず、地域の連携「絆」をより強固なものにしている。また、実行委員は自らの意思で運営に参画し、「トラクターBAMB A」に誇りを持っており、小さな村の大きなイベントを継続・拡大していくことで、郷土愛の醸成につながっている。

また、イベントは道内屈指と高い評価を受けている更別村の郷土芸能「かしわ太鼓」などを発表する場としても位置付けられていることから、次世代への伝統文化の継承にも寄与している。

このように、イベントによって「更別＝元気な村」のイメージが定着するとともに、郷土愛や「絆」の深さが村外に発信されることによって移住・定住化などにつながり、地域の活性化に対する効果が表れている。